

万葉集の「間」字の訓義をめぐって

接続形態「あひだに」「ほどに」についての語彙論的考察

原 田 芳 起

一 問題提起

万葉集の表記として用いられた「間」字の訓として古來取りあげられたものを、その適正であつたかいはしばらく別として、全部列挙してみると、

アヒダ・ホド・マ・ヒマ・ハシ

など、かなり多様に及んでいる。「世間」という成語を識して、「ヨノナカ」とした例は、国語に漢字を当てたものでないから、區別して考えなければならぬが、「間」に対する訓としての「ナカ」も存在したことになる。だからこの例はこの考察の対象からはずす。

右の五つの訓の中で、「ヒマ」は旧訓にのみ存する。万葉語彙として厳密な検討が加えられれば、語彙表から消されるであろうということも十分考えられる。また、「ハシ」という訓も、ある歌についてある学者によつてたまたま採用されたという程度であるので、万葉語彙の中に安定的な座を占めるものとはいえない。

そこで、問題点をもうすこし整理してみる必要がある。固有の国語を漢字で表記したものとしての「間」の用例は、大体二つの類にわかれている。その一つは、「間無」「無間」などと表記された複合形容詞（または形容詞句）の場合で、これまで「アヒダナク」「マナク」「ヒマナク」などの訓を与えられてきたものである。この訓のなかで「ヒマナク」が仮名表記例の裏付けを欠くこと、「ヒマ」という名詞が万葉集の中で証明しがたいこと、などによつて排除される可能性があり、「アヒダナク」「マナク」は仮名表記例もあるので、ほぼ同義の語として認められるから、訓の上での不審は残らない。

他の一つは「間爾」などと表記された諸例で、接続助詞に近い機能になう連語と見られるものである。旧訓新訓を通じて「アヒダニ」「ホドニ」の両訓がかなり恣意的に採用されてきたと思われる。

「アヒダニ」も「ホドニ」も、どちらも仮名表記例を有する。だから「アヒダニ」も「ホドニ」も存在し得る形態ではあるが、それだ

けでは片付けられない問題がある。「間無」を「ホドニ」と訓じた旧訓の拠り所は、もっぱら七音五音の音数律をかなえようとするにあつたらしい。しかるに「アヒダニ」を仮名表記にした歌句の例にもかなりの数の字余りが見られる。とすると、万葉歌が音数律をかなえるために「アヒダニ」の代替として「ホドニ」を用いることがあつたとは考えにくいのではないか。旧訓の原点では「アヒダニ」と「ホドニ」とは交換可能な同義語と考えたらしく思われるが、この両者が万葉語彙としてはたして同義であつたかどうかは、まだわかつていないのではないか。

私の見る所では、中古においてさえも、この両者、「あひだに」と「ほどに」とは、微妙な意味の差を示していたのである。万葉においてはなおさらのこと、「あひだ」と「ほと」「と」は清音)には共時態の言語としての意味の差があつてしかるべきである。同様に、「あひだに」と「ほとに」とには、類以はしていようが全く同一ではないだけの差異が証明できるのではなからうか。

「間無」「無間」の訓から「ヒマナク」が排除されるように、「間無」の訓から「ホドニ」は排除されるのではないか。

二 「間無」「無間」の訓の検討

み吉野の耳^み我^がの嶺に 時無くそ雪は降りける〔間無曾〕 雪は降りける
その雪の時無きが如 其の雨の〔間無如〕 隈も落ちず思ひつつそ来
る その山道を (巻一―一五)

〔〕の中の原表記を旧訓は「ヒマナクゾ」「ヒマナキガゴト」と訓じている。主として音数律をかなえようとして語を選んだものと思

われる。旧訓でも「間無」を「マナク」と訓じた例が圧倒的多数を占めるのに、あえて右のような訓を採用したのには、「マナク」と「ヒマナク」とが同義だという意識が下に在ったことは申すまでもない。

右の歌の異伝として採録された。

み吉野の耳^み我^がの山に 時じくそ雪は降ると言ふ 〔無間曾〕 雨は降ると言ふ 其の雪の時じきが如 其の雨の〔無間如〕 隈も落ちず思ひつつぞ来し その山道を (巻一―一六)

を、旧訓はもちろん前の歌と同様「ヒマナクゾ」「ヒマナキガゴト」と訓んでいる。四音の句、六音の句を避けて、五音七音にかなえようとしたものであることは確かである。

卷十三には、右の歌と同じ発想を用いた類歌がある。

小治田の年^{とし}魚道の水を 〔間無〕 そ人は汲むといふ 時じくそ人は飲むといふ 汲む人の〔無間之如〕 飲む人の時じきが如 吾妹子に吾が恋ふらくは やむ時もなし (三六)

み吉野御^み金の嶺に 〔間無序〕 雨は降ると言ふ 時じくそ雪は降ると言ふ 其の雨の〔無間如〕 其の雪の時じきが如 間も落ちず吾はそ恋ふる 妹がただかに (三五)

この二首についても、〔〕内の原表記の部分を旧訓は「ヒマナクゾ」「ヒマナキガゴト」と訓じている。

右に挙げた三つの歌の旧訓については、寛永板本以後もおほむねこれに従うものが多くて、比較的よく読まれた「略解」「美夫君志」「講義」などもこの旧訓に拠っているが、近代は「マナク」「マナキ」

「マモオチズ」のように改めて「ヒマ」を排除する方向に定まっている。

「間無」「無間」を「マナク」「マナキ」と訓むことは、

阿倍の鳥鵲の住むいそに依る波の〔間無〕このごろやまとし念はゆ

(卷三―三五)

御笠の山に 朝さらず雲居たなびき 容鳥の〔間無〕数鳴く (卷三―三三)

枕辺に 齋瓮を据ゑ 竹玉を〔間無〕貫き垂り (卷三―四〇)

ぬばたまのその夜の月夜今日までに吾は忘れず〔無間苦〕し念へば

(卷四―七三)

うち渡す竹田の原に鳴く鶴の〔間無〕時無し吾が恋ふらくは (卷四―七〇)

春日山御笠の野辺に 桜花木晚隠り 貌鳥は〔間無〕数鳴く (卷六―一〇四)

しぐれの雨〔間無〕し降れば三笠山木末歴くく色づきにけり (卷八―一五五)

奈良山の峯のもみち葉取れば敬るしぐれの雨し〔無間〕降るらし (卷八―一五五)

しぐれの雨〔間無〕な降りそ紅ににほへる山の散らまく惜しも (卷八―一五五)

容鳥の〔間無〕数鳴く春の野の草根の繁き恋もするかも (卷十一―二六)

しぐれの雨〔間無〕し降れば真木の葉も争ひかねて色づきにけり

(卷十一―二六)

(卷十一―三六)

現には逢ふ縁もなし夢にだに〔間無〕見え君恋に死ぬべし (卷十一―三五)

庭清み沖へ漕ぎ出づるあま舟の楫取る〔間無〕恋もするかも (卷十一―三四)

吾妹子を聞き都賀野辺の靡ひ合飲木吾は隠び得ず〔間無〕し念へば (卷十一―三五)

とのぐもり雨降る川のさざれ波〔間無〕も君は念ほゆるかも (卷十二―三三)

山川の滝にまされる恋すとそ人知りにける〔間無〕念へば (卷十二―三六)

真誓よし曾我の河原に鳴く千鳥〔間無〕わがせこわが恋ふらくは (卷十二―三六)

恋衣着奈良の山に鳴く鳥の〔間無〕時無しわが恋ふらくは (卷十二―三八)

衣袖の真若の浦のまなごちの〔間無〕時無しわが恋ふらくは (卷十二―三六)

松浦舟乱る堀江の水脈早み楫取る〔間無〕念ほゆるかも (卷十二―三七)

齋瓮をいはひ掘り据ゑ 竹玉を〔間無〕貫き垂れ (卷十三―三六)

白波の寄する磯廻を漕ぐ船の楫取る〔間奈久〕思ほえし君 (卷十七―一六)

防人の堀江漕ぎ出る伊豆手舟楫取る〔間奈久〕恋は繁けむ (卷二十―一六)

—四三六—

などの類歌を列挙してみると、最も確実な根拠に支えられている。これらは旧訓もすべて「マナク」「マナキ」「マナシ」となっていて全く動揺がない。

さきに挙げた二五・二六・三二六〇・三二九三の場合だけ「ヒマナク」「ヒマナキ」と別の訓を与えた理由が音数を五・七に揃えようとする以外の何ものでもなかったことを裏書きしている。

「ヒマナク」等の訓について、その誤りを指摘した最初の所見は、万葉集古義の、

間無曾は（ヒマナクソと訓たれども、ヒマてふ言の証を未ダ見ず、古語ともおもはれねば）マナクソと訓べし。

であろう。これは妥当な見解で従うべきものである。この二五の歌句、及びその類歌二六・三二六〇・三二九三の旧訓、それに加えて巻四の六二一の、

〔無間〕恋ふれにかあらむ草枕旅なる君が夢にし見ゆる

の一首に「ヒマモナク」という旧訓が見られるだけで、これらの旧訓が妥当ならずとして排除されれば、万葉語彙の中から「ヒマ」という語は存在しなくなる。古義の「ヒマてふ言の証を未だ見ず」は、まちがっていないのである。「古語とも思はれねば」も、おそらく正しかろう。中古の語彙から推しても「ひま」と「ま」とには、かなりの意味の差があったと思われる。「ひま」とは、物と物との間のすきま、空隙・間隙のことである。その物と物との間は「空隙」であって連続はないのである。「ま」は物と物との間を表わす場合でも限

られた空間が連続しているし、持続する事の時間を表わす場合でもその時間は連続しているのだからなければならない。中古の文表現の中における「ひまなし」は、

次の間に、長炭櫃にひまなく居たる人々に

（枕草子・宮に初めて参りたる頃）

のように、空間的に人の居ないすきまをさして「ひま」と言う類が、より本来の用法と感じられる。

さぶらふ人々の泣きまどひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、

（源氏物語・桐壺）

などでは「ひまなく」は時間的に「絶えまなく」「しきりに」の意に解されるもので、万葉の「まなく思ふ」「まなく降る」ときわめて近い意味になるが、上代のこの副詞的用法の「まなく」が消え去ったのを埋めて登場したもので、「ひまなく」としては第二次的な転義であらうと思われる。それでも、「涙のひまなく流れ」という表現は、涙に覆われて涙の流れないすきまもないさまを視覚的にとらえた意味がまだ残っているように思われる。中古においても「ま」は事の持続するある量の時間である。時間の連続の、ある長さをくぎって「ま」というのである。

風さわぎむら雲まがふ夕にも忘るるまなく忘れぬ君（源氏物語・野分）

の例でも、忘れていくという事の持続する時間が「忘るるま」である。この点で上代と比べてさしたる意味の変化はない。

わがやどの萩咲きにけり散らぬ間に早来て見べし平城の里人（万葉

・卷十一 三六

「ひま」に「暇」の意味を付与した用法はずっと後世のものと思われる。源氏物語に、

御心地もよろしきひまなり。(葵)

のような例があるが、病気の間隙であり、小康を得ている時間というのとは意味のありかたに微妙なちがいがありそうである。

このように見てくると、古義が「ヒマ」について「古語とも思はれねば」と説いたことは正当だと評価することができと思う。

旧訓が音数律にかなえようとして「間」に「ヒマ」を与えたのは妥当な訓でなかったという点で否定されざるを得ない。

六二一の「無間」は、旧訓「ヒマモナク」で、これは上に述べたように認めがたい。玉小櫛・略義・古義以降「アヒダナク」と訓み改めている。

風をいたみいたぶる波の〔間無〕わが念ふ君は相念ふらむか (卷十 一三七六)

大伴の三津の白波〔間無〕わが恋ふらくを人の知らなく(同 一三七七)等になると、「アヒダナク」としか訓みようがなく、旧訓もそう読んでいる。

万葉語彙としては、「あひだなし」は「まなし」と、ほぼ同義の語として存在したと見なしてよい。

三 「間爾」と「程爾」

万葉の「間爾」に対する、近代の主流的な訓を見ると、ある歌では「ホドニ」となり、ある歌では「アヒダニ」となっていて、それ

がすべて五音句七音句の音数を揃えるためになされている。このことは旧訓のみでなく、その後もほとんど変わっていない。万葉語彙としての「あひだに」と「ほどに」とは、それほど近いものであったろうか。

まず、従来多少の異見異説はあっても、大体において主流を占めていると思われる「間爾」↓「ホドニ」の例を列挙しよう。

(1) 草枕〔客有間爾〕佐保川を朝川渡り 春日野を背向に見つつ あしひきの山辺をさして 晩閑と隠りましぬれ (卷三 一四〇)

(2) 家ゆ出でて〔三歳之間爾〕垣もなく家失せめやと (卷九 一七四)

(3) 鴨すらも己がつまどち求食して〔所遣間爾〕恋ふといふものを (卷十二 一三九)

(4) 夢かも現かもと 曇り夜の〔迷間爾〕あさもよし城の上の道ゆつのさはふ石村を見つつ 神葬り葬りまつれば (卷十三 一三三)

(5) 八重疊平群の山に (四月与五月間爾) 薬獵仕ふる時に (卷十六 一六五)

(1) については、寛永板本の旧訓は「タビニアルマニ」、細井本は「タビナリシマニ」、考は「タビナルマニ」、略解「タヒナルホドニ」、槻落葉「タビナルハシニ」など動揺がはなはだしいが、略解の訓が古義・考証にも採られ、近代の諸注はこれに従うものが多く、定説化している。ただ山田孝雄博士の講義に、

間はハシとはよまるれどホドとよまむことは道理なし。又ハシといふ語は俗にトタンニといふ如き語なればここにあはず。間はすなほにマとよむをよく当れりとす。然るときは、考の如く特に字足らずによむ

べき必要なきによりて旧訓をよしとす。

と説いて、旧訓「タビニアルマニ」を採用している。この諸説批判には、まことに透徹した見識が示されていて聞くべきものがあるが、講義が卷三までにとどまっているので、あとの四例をいかに訓まれるのであろうかを知り得ないことが残念である。「間爾」を「マニ」と訓することは、前節に考えたように類例も少なくないので納得できるのだが、右に列挙した(1)から(5)までは統一した訓を与えるべきだと思われる。(2)を「ミトセノマニ」、(3)を「オクルルマニ」では、何とも格調を破壊してしまふ。

(2)については、神田本に「ミットシノマニ」という訓があるが、「ミットシ」は語の体を成さない。寛永板本の旧訓は「ミトセノホドニ」とあつて、これが今日までの定訓化している。略解の「ミトセノカラニ」は「間」の字義を無視している欠陥がある。

(3)の旧訓は「オクルルホドニ」、元暦校本には「ワスルルホドニ」「カクルルホドニ」がある。私注に「ステラルルマニ」、新考に「オクルルマダニ」など、「間」を「マ」と訓じようとした試みは見えるが、大勢は旧訓に従つて今日に至っている。

(4)については、旧訓「マヨヘルホドニ」、考「マドヘルホドニ」とあつて、大勢は考の訓に従つて今日に至っている。ただ略解が第二案として「マドヘルハシニ」を出しているのが小異である。

(5)は、寛永板本の旧訓「ウヅキトヤサツキホドニ」とあるのは筆耕の誤りか。西本願寺本その他に「ウツキトサツキノホドニ」とあるが、ほんとうの旧訓のすがたであらう。これには以後まったく異

見が出ていない。

ここで考えてみたいことは、「間爾」を「アヒダニ」と訓じた次の諸例との比較である。

(6)おしける難波の国は、葦垣の古りにしさと人皆の思ひ息みてつれもなく〔有之間爾〕續麻なす長柄の宮に真木柱太敷敷きて食食國を治めたまへば(卷六—九六)

(7)死にも生きも君がまにまと思ひつつ〔有之間爾〕うつせみの世の人なれば大君の命畏み天さかる夷治めにと朝鳥の朝立ちしつつ群鳥の群立ち行けば(卷九—二六五)

(8)真袖まそでもち床打ちとこうち払ひ君待つと〔居之間爾〕月傾きぬ(卷十一—三六)

(9)後も逢はむ吾わがにな恋ひそと妹は言へど〔恋間〕年は経につつ(卷十二—二六四)

(10)恋しけく日長きものを見まく欲り〔念間爾〕たまづさの使の来れば嬉しむと吾が待ち問ふに(卷十七—三六)

これらには訓の異説は全くない。(6)(7)「アリシアヒダニ」、(8)「ヲリシアヒダニ」、(9)「コフルアヒダニ」、(10)「オモファヒダニ」と訓んでいる。当然の訓で、異見があるべくもない。

ただ、問題は、(1)から(5)までと、(6)から(10)までとは、全く同じ接続形態を見せている。どうして前者は「ホドニ」で、後者は「アヒダニ」なのか、ということである。意味が全く同じで、漢字表記も全く同じであつて、別の訓が振られるとすれば、それだけの動かしがたい条件がなければなるまい。はたしてそのような必然的条件が

あつたであらうか。

列挙した例から帰納できることは、ただ一つしかない。(1)から(5)までは、字のままに「アヒタニ」と訓ずると字余り句になるということである。これに反して、(6)から(10)までは、「ホドニ」と訓めば字足らず句になる。

(6)から(10)までを「ホドニ」と訓んで字足らず句にした場合、いちじるしく調をそこなう。前節で考えた「マナクゾ」の四音句、「マナキガゴト」の六音句の字足らずは、一種の古歌体と見られるべきものであつたので、支障とならないだけでなく、むしろ文体効果を与えている。だが、右の(6)から(10)までの歌には字足らずは拒否されるであらう。旧訓がここで「ホドニ」を避けたことは適當である。

残る問題は、(1)から(5)について「アヒタニ」を避けたことで、その字余り句を拒否したことが妥當であつたかどうか、「間」を「ホド」と訓むことが妥當であつたかどうか、という点にあらう。万葉に字余り句は決して少なくない。句中に母音音節を含む場合の字余り句はむしろ普通のことである。

「あひだに」の仮名表記例がある。

(11)年月もまだあらねば 心ゆも〔於母波奴阿比陀爾〕 うち靡き臥しぬれ (卷五―五四)

字余り八音句である。(1)から(5)を「アヒタニ」と訓ずれば、これと全く同じ字余り八音句になる。

(12)これをおきてまたはありがたし さ並べる鷹は無けむと 心には思ひ誇りて 笑まひつつ〔和多流安比太爾〕 狂れたる醜つ翁の (中

略)二上の山とび越えて 雲隠り翔り去にきと 帰り来て咳れ告ぐれ

(卷十七―四三二)

これは七音句で正常である。字余りになるならないは、「あひだに」を用いる用いないを決定する必然条件ではないことを示している。

例証をあげて、「あひだ」の仮名書きを含む句を拾つてみる。

(13)ほとときす (安比太之麻思於計)(卷十五―三七五)

(14)余能安叱太母 続きて見に來む (卷十七―五四四)

(15)おほしく見つつそ來ぬる(許能美知乃安比太) (卷十四―三三七)

(16)家布能阿比太波 楽しくあるべし (卷五―八三三)

(13)は「間暫し置け」で八音、(14)は「世の間も」で六音、(15)は「此の道の間」で八音、(16)は「今日の間は」で七音。仮名書き七例の中で(11)(13)(14)が字余り句、対して(12)(16)が字余りでない句、偶然ながら四対二で字余り優勢である。

当然の結論として、「間アヒタ」を含むと判断される句においては、字余りは誤りでも破格でもないということになり、(1)・(5)の「間爾」は「アヒタニ」と訓んだ方が統一が取れ、条理が保たれるということになる。

もう一つ明らかにしておきたい重要なことは、字余り句を避けたいために「ホドニ」を代入した根拠に、「あひだに」と「ほどに」を全くの同義語であるという解釈があつたと推定されるけれども、万葉集の中での「あひだに」と「ほどに」との間には、かなり明確な一線を引くことが可能であるという点である。

明らかに「ホドニ」と訓すべきものには、仮名書き例二件、「程爾」

と書いた例一件がある。山田孝雄博士が講義で指摘されたように「間」字を「ホド」と訓むことにはどうも無理があること、上にやや冗漫に論じて来た如くである。

(17) 妹が門いや遠そきぬ筑波山〔可久礼奴保刀爾〕袖は振りてな (巻十四—三九)

(18) 青波に袖さへ濡れて漕ぐ舟の〔可之布流保刀爾〕さ夜更けなむか (巻二十一—四三)

(19) 霞立つ川の河原に君待つと〔伊往還程爾〕裳の裾濡れぬ (巻八—五八)

意味の面で「あひだに」と「ほどに」との間に区別がないだろう。本来の意味では、「あひだ」は物と物との中間、または事と事との間の時間を表わし、「世のあひだ」と言へば生涯、生きて命終る日までの時間をさすし、「君待つと居りしあひだに」と接続条件を提起する表現においても、時間の経過が意識されているであろう。

「ほと」(万葉では「と」は清音)は、時分という意味に近い。(17)の「筑波山隠れぬほとに」は、時の継続の中でそれを限り計る気持がある。筑波山が隠れて見えなくなる以前でなければ袖を振っても見えないのである。袖を振る愛妻の姿が見えるぎりぎりの限度を計る気持が含まれている。(18)の「内は」戕阿振る程に」と解読されているが、舟をとどめてかきを打ち立てているうちに夜も更けてしまうのではないかといらだつ気持を詠じた歌であろうが、舟を漕ぐうちに時間はどんどん経過する、舟を港に着ける頃にはと、その時分をおおよそに限定する意がある。(19)は、「イカヨフホドニ」と

訓まれている。この訓に疑問の余地はない。「君待つとい通ふ」であるから、霧の深い河原を行きつ帰りつしていたのである。そこに時間の経過があるが、裳の裾を河波のしぶきなどにしとどに濡らしてしまふまでには、その時間がかかなり長かったことを思わせる。その時の経過の程度を示す意もあろう。河原の渚をさまようっているうちにの意味である。中古の「ほどに」の意とはほぼ同じである。「時に」が比較的明確に時点または時期をさして後行の叙述を限定するに比べて、おおよそに時分を限って後行の叙述を限定する。「あひだに」のように事と事との中間に連続する時間をさす意を表わすのではないと言えようか。

同じく「間」で表記しても「まに」の方は用法の上で「ほどに」に近いと見得るかも知れない。

(20) 風吹きて河波立ちぬ引舟に渡りも来ぬか夜の更けぬ間に (巻十二—三六)

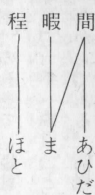
(21) 川の河波は立つともわが舟はいざ漕ぎ出でむ夜の更けぬ間に (同—三五)

(22) 白たへのわが紐の緒の絶えぬ間に恋結びせむ逢はむ日までに (巻十二—三六)

だが、「ま」にはやはり「あひだ」と重なりあう用法・意義がはっきり認められるので、右の場合も、「夜が更けてしまわないまでのあいだに」「紐が絶えてしまわないまでのあいだに」の意味を基底に置いた表現であろう。

万葉仮名表記例を別にして、「あひだに」と「ま」と「ほと」との

三語と漢字との対照を見ると、これまで考えて来たほど恣意的ではなくて、



となつて、相混じない境界を「あひだ」「ま」と「ほと」との間に認めることができると思うのである。

接統形態としての「ほとに」は例がきわめて少なく、それも万葉後期に限られるようである。これがさかえるのはむしろ中古に入つてからと見てよからう。「あひだに」には中古に入ると古今集時代まではかなりよく用いられているが、その後は後退してゆく。「あひだに」「ほどに」「うちに」「時に」などが共時的に並んでいる時期には、中古でもその意味の微妙な差が保たれていたようで、このことについては、拙著「平安時代文学語彙の研究（前編）」の「『うちに』が接続する文について——文型と意味——」の中で言及しているので、ここには省略する。

万葉研究の面では門外漢であるので、見当のはずれたことを言っていることがあろうと恐れている。叱正を乞う次第である。

(49・1・9 橋)